

『源氏物語玉の小櫛』受容史

田 中 康 二

一、本居宣長と源氏物語

本居宣長が源氏物語に出会ったのが正確にいつの時点であるかということは必ずしも明らかではないが、今井田家に養子入りし「今華風」と号した二十歳頃には『源氏物語覚書』という覚書を著し、源氏に対する関心が高かったことがうかがえる。京に留学した宝暦二年には『帚木抄』を書写し、翌年には『弘安源氏論義』を書写している。そうして古典文学研究の研鑽を積む中で、次のような源氏物語観を披露している（『排蘆小船』（五一））。

倭文ハ源氏ニ過ル物ナシ。源氏ヲ一部ヨクヨミ心得タラバ、アツパレ倭文ハカ、ル、也。シカルニ今ノ人、源氏見ル人多ケレド、ソノ詞一ツモ我物ニナラズ、今日文章カク時ノ用ニタ、ズ。タマ々雅言ヲカキテモ、大ニ心得チガヒシテ、アラレヌサマニカキナス、コレミナ見ヤウアシク、心ノ用ヒヤウアシキユヘ也。

和文を執筆するための実用書として源氏物語は意味があるというのである。そのように源氏を他の古典文学と同等の扱いをしていた宣長が、源氏中心主義にシフトするのは、おそらく『湖月抄』を購入し、精読を始めた宝暦七年八月

からであろう。翌年から門弟を相手に講義を始める。生涯を通じておこなった四回の講義は次の通りである⁽¹⁾。

第一回 宝暦八年夏、明和三年六月三十日（式旦二日・六日・九日）

第二回 明和三年七月二十六日、安永三年十月十日

第三回 安永四年正月二十六日、天明八年五月十日

第四回 天明八年六月二日、寛政七年四月二十九日（藤末葉まで）

四回の通読は門弟からの要請という要素もあったであろうが、宣長の志向が源氏に合致していたことを意味している。第一回の講義を始めた頃には『安波礼弁』と『紫文訳解』を著し、宝暦十三年六月には『紫文要領』をしたためた⁽²⁾。そこから安永六年七月以前にこれを改題、改訂して『源氏物語玉の小櫛』とし、さらに寛政年間には『源氏物語玉の小櫛』一の巻・二の巻とした⁽³⁾。宝暦年間に一旦は完成を見た『紫文要領』が三十年の歳月を掛けて『玉の小櫛』として刊行されたことの背景に、『古事記伝』の執筆という要素が絡んでいたことは言うまでもない。たとえば、そのことを『玉の小櫛』六の巻の末尾（若紫巻の後）に次のように記している。

上件五巻は、思ひとりたる事ども、をさゝのこさず、しるしいでつるを、次々なほそらの巻々、末いと長きを、事しげき身には、えたはずなん有ければ、しばしこゝにとぢめてむとす。さるはいとくちをしく、いふかひなきわざとは思へど、我身七十ちかくなりて、いとゞけふあすもしらぬ、よはひの末に、むねと物する、古事記のちうさくなどはた、いまだえ物しをへざるうへに、何やくれやと、むつかしくまぎるゝことどもはた、いと多くてなん。思ひの外に、今しばしながらふるやうも有て、心もほけず、いとまもあらば、又々もおもひおこして、すぎすぎしるしもつぎてんかし。

年齢が七十近いこと、『古事記伝』も完成していないこと、万事多端であることなどを理由に以下の巻の注釈を簡素

にすることを宣言している。

とはいえ、改題・改訂を経て出版まで漕ぎ着けた背景には、やはり源氏物語に対して並々ならぬ思い入れがあったことを指摘することができる。古学への志とは別に源氏物語に対する情熱があったのである。ただし、情熱だけではどうにもならないこともある。門弟から源氏物語注釈の貸し出しを依頼された折に、次のような返事をしている。

一、源氏物語玉の小櫛之義ハ、いまだ出来不_レ致、わづか計ならでハ出来不_レ申候。此物語注釈多く御座候内、先ハ湖月抄を御覧可_レ被_レ成候。(寛政五年五月二十三日付千家俊信宛書簡)

おそらく『古事記伝』執筆および出版に手間がかかるために、後回しにせざるを得ないというわけであろう。仕方がないので、次善の策として『湖月抄』を参照するようにアドバイスをしているのである。

このように沈滞していた『玉の小櫛』刊行が劇的に変わる重要な出来事があった。すでに指摘されていることであるが、浜田藩主松平周防守康定が宣長の源氏講釈に感銘を受け、『玉の小櫛』の出版を強く所望されたという事情があった⁽⁴⁾。次のような書簡がある。

一、愚老先年、源氏物語の玉の小櫛と申物を書かけ置申候処、近頃周防守殿右之書を板行被_レ致度由にて、何とぞ早々書立申候様に被_レ申候に付、近來とりかゝり、一ぺん草稿出来申候。右の書の大体は、先づ源氏物語の大意并作者何かの事、又年紀の図、人々の年紀の考、異本校合の事、注釈共の論など書申候て、物語の注は桐壺、帚木二巻、右之通此度板行致可_レ申と存候。周防守殿序も願置申候。右に付貴君の御序も一篇入れ申度候間、何とぞ御案じ被_レ下候様に致度候。序は枕詞など多く入れ、随分文章花やかなるが宜候間、其御心得にて奉_レ頼候。(寛政八年九月二十三日付藤井高尚宛書簡)

長年の出版計画が殿様の一声で軌道に乗ったのである。『玉の小櫛』の構成も大意并作者何かの事（一・二の巻）・年紀（年立）の図（三の巻）・異本校合の事（四の巻）・注釈（五から九の巻）と具体化している。浜田藩主の件は『玉の小櫛』に収録された藤井高尚の序文にも記されている。

此めでたき玉の小櫛を、こたみかくとり出たまふよしは、うごきなき石見の国、しき浪よする浜田の里をしらせたまふ、色かへぬ 松平の君の、かしこくもきこしめし及びて、ねんごろにとひ給へるに、此翁の君しも、めかりしはやきとかいふらむやうに、いとまなくて、あらたまの年久しく、とりも見たまはざりけるを、くしげの中よりさがし出て、あかづけるをのごひきよめて、奉り給へるを、おなじくは世にひろめて、天のしたの人のたからとなしてんと、ありがたくおもほしよりて、せちにそ、のかしたて給へるになんありける。

ほかの多くの著作と同様に、門弟からの強い要請によって上梓に踏み切ったというわけである。そこからこんどは『玉勝間』の出版作業と重なっていた。『学業日録』によれば、寛政八年九月十八日に清書（板下作成）を始め、寛政九年九月四日に板下を書き終えている。板下執筆と並行して校合刷の確認作業も進めた。九の巻の再校の確認を終えたのは寛政十年七月のことである。ただし、誤植等の確認作業のため、すぐに版本が流布することはなかった。再校校了から十ヶ月後の寛政十一年五月によりやく下板し、待望の版本が流通することになった。

以下本稿では、『玉の小櫛』の享受を通して宣長の源氏学が果たした役割を検証したい。

二、先師著作の補遺―鈴木胤『源氏物語玉小櫛補遺』

『玉の小櫛』は同時代、そして後世においてどのように受容されたのか。一の巻「おほむね」・二の巻「なほおほむ

ね」に記された「物のあはれを知る」説については別に論じたのでここでは触れない⁽⁵⁾。『玉の小櫛』の注釈部（五の巻から九の巻）を直接の対象とした研究書を見ていきたい。まずは『源氏物語玉小櫛補遺』である。鈴木胤が『源氏物語玉小櫛補遺』を執筆するきっかけとなったものは、『玉の小櫛』自体にある。『玉の小櫛』巻の七巻頭には次のような文章が記されている。

末摘花よりつぎ／＼の卷々よ、又々とは思ふものから、そはいとたのみがたきわざにしあれば、としごろ考へ出づる事どものあるところ／＼、こゝかしこと、書つけおきつるかぎりをも、今とりあつめて、いさゝかながら、かつがつしるしつぎてんとす。はやくの注釈ども、ときひがめたる事共、見過しがたくおほゆるふし／＼は、いと／＼おほかれど、いかゞはせむ。はじめ五巻に、ものせしにならひて、見む人、さる心して、注釈どもは見よかしとぞ。

末摘花巻からは以前の書込を集成して仕上げ、新たに注を施すことをしないと宣言している。この方針を受けて、巻の七以降は明らかに簡素な注釈になっている。もちろん、宣長も昔におこなった注釈内容がよくないことは承知していて、若紫巻までの注釈を標準にしてほしいという、何とも頼りない希望を記している。それは前節でも触れたように、『玉の小櫛』に関わっている時間がなかったからである。

宣長自身は意に満たない『玉の小櫛』でも、やはり門弟への便宜のためには、最後までやり遂げなければならぬ。そういう思いは、『玉の小櫛』の末尾に詠まれた次の歌に込められている。

なつかしみ又も来て見むつみのこす春野のすみれけふ暮ぬとも

この歌は「春の野にすみれ摘みにと来こしわれぞ野をなつかしみ一夜寝にける」（万葉集・巻八・山辺赤人）を踏まえ

て、不本意ながら不十分な注釈を擱筆する心残りを表している。「春野のすみれ」とは紫のゆかり、つまり源氏物語のことを意味する。時間がなくてここで終わるけれども、源氏が慕わしいので注釈し残したところは再び取り組むことにしよう、といったところか。最後の最後まで『玉の小櫛』への未練を捨てきれないごとくである。捲土重来を期すという意気込みが見え隠れする。

このように『玉の小櫛』が注釈として未完成であることは、自他ともに認めるところであった。結局、宣長自身が『玉の小櫛』に再度取り組むことはなかったが、その志を継ぐ者が現れた。門弟の鈴木胤である。胤ははじめ漢学者に入門したが、後に宣長の門を敲き、主に国語学の方面で業績を残した。その胤が『玉の小櫛』の後を継ぎ、『源氏物語玉小櫛補遺』（文政三年春刊）を執筆、出版した⁽⁶⁾。胤の奥書は次のごとくである。

故鈴屋大人の玉小櫛は成はてざる書にて、後の補ひをまたるゝ心なる事、奥書にいはれたるが如し。おのれ今其志をつぎてかく物しつるも、猶たゝかたそばにて更にたらへりとはいふべくもあらず。元よりをぢなきが上に、暇もなき程のしわざにしありければ、猶後の人の補ひ又正しをまつ心にてぞ。

宣長の意を汲んで、これを増補することを志したという。なお、本書自体もさらに増補を期待する旨述べているが、これは謙辞と考えるのが穩当である。有り体に言えば、師の著作の補遺を著すことの言い訳と言つてよからう。増補にはそれなりに自信があったと思われる。

それでは、具体的に『源氏物語玉小櫛補遺』（以下『補遺』と略称）の中身を見ていくことにしよう。『補遺』は上下二巻より成り、玉蔓巻までが上巻で初音巻からが下巻となる。上巻には二四一箇所、下巻には二四〇箇所にわたる注釈が収録されている。そういった『補遺』の注釈内容を『玉の小櫛』との関係で整理すると、（１）師説の追認、

(2) 誤謬の訂正、(3) 対案の提示、(4) 遺漏の指摘、(5) 注釈の補足、という五種類に分類することができる。順に見ていきたい。

(1) 師説の追認

娘はさまざまな面において宣長からの期待も大きく、その期待に応えるべく努力した。『補遺』においてもそれは明確に表れている。娘は宣長と同様、細かい本文校訂について吟味する。たとえば、「げによくこそと」(篝火、二丁ウ)について、宣長は「ともじ衍なるべし」としているが、娘はこれを受けて、「小櫛にいはれつることく、一本にはともじなし」と追認している。これについて、宣長がどのような根拠に基づいているかということは不明であり、おそらくは係り受けの不自然さがその理由であろうと思われるが、娘は異本という客観的な証拠を提示しているのである。ここからは単に師説を盲信するというのではなく、師説を補強しようという意思を読み取ることができる。また、「なよびかにおかしき事はなくて云」(篝火、一丁オ)について、娘は次のように論じている。

是は卷々にある歌をおとしめいへると同意にて、源氏の君の事をかくいふは、即作者の卑下にて、この物語の作りざまの、つたなくおかしからぬよしを、下にことわりたるなり。かたの、少将の物語、又いせ物語などのふりとは、かはれるよしなり。されどそは、心ありてわざとしか作りたるものにて、物のあはれを深くして、見る人のことにふかく感ずるやうにせんためなる事、小櫛の初の、大むねの所にとかれたるが如し。

篝火巻冒頭における源氏の毀譽褒貶の噂について、世間の評判に反して本当は地味であったことを「作者の卑下」と評している。だが、それも作者の下心があって、読者に「物のあはれ」を知らせるためであるというのである。ここで娘は注釈部を追認するのではなく、『玉の小櫛』一・二の巻にわたる「大むね」に言及し、これを称揚するのであ

る。たとえば、それは次のような箇所を指している。

此物語は、よの中の物のあはれのかぎりを、書あつめて、よむ人を、深く感ぜしめむと作れる物なるに、此恋のすぢならでは、人の情の、さま／＼とこまかなる有さま、物のあはれのすぐれて深きところの味は、あらはしがたき故に、殊に此すぢを、むねと多く物して、恋する人の、さま／＼につけて、なすわざ思ふ心の、とり／＼にあはれる趣を、いとも／＼こまやかに、かきあらはして、もののあはれをつくして見せたり。

このように注釈部を追認するだけでなく、総論部についても評価の対象としているのである。

(2) 誤謬の訂正

『補遺』が『玉の小櫛』の「補遺」である以上、『玉の小櫛』が犯した誤謬を指摘し、これを訂正することが不可欠である。たとえ敬仰する師の説であっても、そこに過誤があればこれを是正しなければならないのである。『補遺』において、宣長説に言及する箇所でも多いのはこの項目である。朕は師説の誤謬を訂正することが、むしろ師説の価値を高めることを確信していたのであろう。

たとえば、「女みこたちなども」（花宴、十二丁オ）について、『補遺』は次のように記している。

小櫛に^云とあれど、いかゞあらん。天子臣下の子をみことの給ふ事ありや、いとおぼつかなし。

「^云」とは何か。もちろん当該箇所における『玉の小櫛』の注釈である。それでは『玉の小櫛』にはどういう注釈内容なのか。次のごとくである。

みことあるは、姫宮たちのごとく聞ゆれども、このやうを思ふに、なほ右大臣の御むすめたちの事とこそ聞えたれ。源氏君の御姉妹としては、事のさまおだやかならず。

「女みこたち」を内親王とした旧説に異議を申し立て、宣長は「右大臣の御むすめたち」と解釈している。胤はこれに反論しているわけである。見てわかるとおり、『補遺』の書き方は『玉の小櫛』本体を前提になされている。言い換えれば、『玉の小櫛』を座右に置いて読むべき書という認識なのである。要するに、『補遺』は『玉の小櫛』に従属する注釈書ということができよう。

(3) 対案の提示

胤は宣長の門弟として、誤謬を訂正することが学問を進展させるという理念のもとに『補遺』を著したが、誤謬と言い切ることができない微妙な注釈に関しては、これに対案を示している。たとえば、「そこらつどひ給へる人の」(榊、四十一丁左)について、『玉の小櫛』は次のように述べている。

これは、つどひたる人のとあるべき文なり。中宮をおき奉りて外は、皆女房のみなれば、地の詞に、給ふといふべき例にあらざれば也。

これに対して『補遺』は次のように記す。

小櫛に^云とあり。胤按ふに、つどへ給ふにてもあるべし。

地の文における敬語法の不備をいかに解消するかという観点から、宣長は敬語を割愛するという選択をし、胤は「つ

どふ」を自動詞から他動詞に変更することによって、問題を解決しようとした。いずれも問題の所在の認識という点では共通しているが、具体的な処理の方向性が異なる。両説併記の理由がここにあるといつてよい。

また、「波風にさわがれてなシど」(明石、二丁オ)について、『補遺』は次のように述べる。

一本になんと、あるを、小櫛によしとせられたれど、今思ふに、なんどもあしくはあらじ。

『玉の小櫛』四の巻の校異において、宣長が「なんと」を採用していることを否定するのではなく、「なシど」とする対案を提示するのである。このような処置は、判断を後世に委ねるという意向を反映したものと見なすことができる。必ずしも過誤といえない箇所に対して、穏当な処置であるといえよう。

(4) 遺漏の指摘

胤は寛政四年に入門し、宣長から教えを受けたが、講義等で宣長から直接聞いたことを記していることもある。たとえば、「あやしと見たてまつり給へるを」(桐壺、八丁左)に次のようなことを書いている。

こゝに脱あるべしと、故大人にさきにき、たるを、小櫛にはもらされたり。

これは『玉の小櫛』にない注釈を宣長からの伝聞により遺漏を埋めようとした箇所と言える。このような指摘はここだけであるが、『玉の小櫛』の注釈部でない宣長説が補われているところはまだほかにもあるかもしれない。

(5) 注釈の補足

『玉の小櫛』には指摘されていないが、宣長の精神を受け継いで記したと思われる種類の注釈がある。一つは(A)「ど・ば・も」などのてにをはの訂正であり、もう一つは(B)俗言による解説をあげることができる。

(A) てにをはの訂正

宣長はてにをは研究を推し進め、係り結びの法則を明確に定式化した。その成果は『てにをは紐鏡』や『詞の玉緒』として公にされた。宣長はそういった文法を文学作品の読解に用いたのであるが、それと同時に本文の誤写の推認にも応用するようになったのである。文法法則に反する用法は改めなければならないというのである。たとえば、「おぼしこりにけると」(空蟬、一二)について、『玉の小櫛』は次のように記している。

る。り。を。写し誤れるなるべし。すべて後の世の人は、古詞づかひの、定まり有しことを、えしらずして、けりといふも、けるといふも、たゞ同じことと心得たるから、なほざりにして、り。と。を。を。たがひに写し誤れることおほし。心すべし。

これは活用形に関する誤謬を指摘した箇所であり、宣長が得意とする議論である。その誤謬は誤写に起因するものであるという判断から、これを原状回復する方向へと向かう。異文のあるなしにかかわらず、文法法則に依拠して改変するのである。このような改変は『補遺』に頻出する。「何がし此寺にこもり侍るとは」(若紫、十一丁ウ)に対して「る。は。りを誤れり」と指摘するのをはじめとして、「すけせしめたてまつりてしに侍る」(夢浮橋、七丁ウ)に対する「る。は。例のりをあやまれるなり」まで、十箇所以上の指摘がある。必ずしも全部を認めるわけにはいかないが、文法法則を根拠にして改変するという信念が受け継がれ、応用されたと考えることができる。

また、宣長は文の係り受けについて、非常に厳密に考えていた。それゆえ、係りと受けとの関係によつて、「ど」と「ば」とは厳密に区別しなければならないと考えたのである。たとえば、「くれかゝりぬれど」(若紫、七丁ウ)について見てみよう。

くれか、りぬれど、をこらせ給はずなりぬるにこそはあしめれ。はやかへらせ給なんとあるを、だいとこ、御もの、けなどくは、れるさまにおはしましけるを、こよひはなをしづかにかちなどまいりて、いでさせ給へと申す。

これについて、宣長は次のように注釈している。

どはばの誤なるべし。日も暮か、りぬる故に、人々、云々はやかへらせ給なんと申す也。然るを後の人、おこらせ給はずへかけて、ばにては聞えずと思ひて、さかしらにどと改めたるか。さらでもどとばとは相誤れること多し。こ、の文は、どにては、中々と、のはざることも也。其故は、くれぬれどといふは、地の詞、おこらせ給はず云々は、人の申す詞なれば、其堺に、詞なくてはと、のはず。よく味ひ見べし。

ここで宣長は「くれか、りぬれど」の部分がどこに係つていくかということに焦点を絞つて、「ど」ではなく「ば」でなければ「と、のはざる」と述べているのである。なぜそのように判断するかといえば、それは「くれか、りぬれど」は地の文であり、「おこらせ給はず云々」は会話文であるから、係り受けの關係から考えて順接の「ば」でなければならぬというのである。この判断の当否については、議論のあるところであるが⁽⁷⁾、「ば」と「ど」という文脈を左右する助詞に注目するところが宣長注釈の特徴でもある。

このような係り受けに従つて、字句を改変することは臆もおこなっている。たとへば、「おもひいづれど」(野分、八丁左)について見てみよう。『湖月抄』の本文は次の通り。

そらのけしきもすごきに、あやしくあくがれたるこ、ちして、何ごとぞや、又わが心に思ひくは、れるよと、おもひいづれど、いとにげなきことなりけり、あなもののくるおしと、とぎまかうさまに思つつ…。

空の景色のおそろしさのために気もそぞろになってしまつて、これまでのことを振り返ったり反省したりという場面である。ここについて、○ 娘は次のように述べている。

○ どはばを誤れるなり。何事ぞやとあやしみて、さて思ひ出て見れば、といふ意なり。

この処理は必ずしも異本などの根拠に基づく改変ではなく、純粹に文脈の読解に依拠した改訂である。それは文の係り受けといった文脈読解に基づく改訂であり、宣長の精神を受け継いだ注釈と言つてよからう。

(B) 俗語による解説

宣長は俗語による注釈を重視した。全首全文俗語訳をおこなつた『古今集遠鏡』がその代表であるが、それ以外にも俗語による注釈が散見される。たとえば、「あさましきまで」(桐壺、六丁)について、「此詞は、よき事にも、あしき事にもいひて、俗言に、けしからぬきものつづれたことなどいふ意也」と記している。このように俗語による言い換えを記した例は枚挙に暇がない。それは宣長の語釈の有力な方法であつた。娘もこれを引き継いで俗語を用いた語釈をしている。たとえば、「そこはぢにこそあらめ」(空蟬、五丁オ)に対して「持は、今俗にいふせきの事なり。モロフシ唐の碁の書に見えたり」という注釈を記している。俗語訳は娘にとつても重要な古語解釈の方法であつた。『補遺』刊行の翌年に娘は『雅語訳解』を刊行している。それは平安朝の物語等から抽出した「雅語」をイロハ順に立項し、これに俗語を配置するという形式である。「ぢ」の訳語には「碁にぢとあるは今いふせきなり」とある。この訳は『補遺』から切り出したものである。つまり、『雅語訳解』は『補遺』の俗語訳の部分を抽出して発展させた辞書ということができよう。今試みに『補遺』と『雅語訳解』とに共通する被注語を抜き出して、双方を対照させると次のようになる。

被注語	玉の小櫛補遺	雅語訳解
けしきばみ〔末摘花〕	俗に気持があるといふ意の詞なり。	ケブラヒヲシラセル キモチヲミセル
くはや〔末摘花〕	こゝにての意、俗にそりやといふ詞のごとし。	是ハヤの転也。俗にソリヤといふがごとし。
心ゆかぬなしめり〔紅葉賀〕	心ゆくとは、俗に存分なといふことなり。	存分ナ ムネガハレル
つみふかき身のみ〔須磨〕	つみは前世の罪にて、俗に因果なる此身といふ意なり。	因果ナ身ノ上
あぢきなし〔薄雲〕	俗にらちもないと云が如し。	ムヤクナ事ヂヤ ラチモナイ
おほなくかはらけとり給 <small>云</small> 〔少女〕	こゝにては、俗に随分奇特にといふが如し。	分相應ニ
はなはだひざうに〔少女〕	ひざうは、今俗に法外といふ意ときこゆ。	非常也。法外なる事にもいふ。
花におれつ、〔胡蝶〕	おれはおろけのつまりたるなり。俗にうつゝぬかしてといふがごとし。	おろけてのつまりたるなり。タボケテ ウツ、ヌカシテ
人もうんじ給ぬべければ 〔横柱〕	うんずは、俗にあいさうつかすといふが如し。	アイサウツカス セイキラス
つれなうて〔横柱〕	俗に、何くはぬ顔してゐて、といふにあたる。	シラヌカホシテキル ジイツトシテキ ルドウヨクナ ジャウガコワイ
かたへはきはひあつまり給 ふ〔上若菜〕	かたへは、俗に一ツはといふに同じ。	ヒトツハ
万の事につけてめであさみ 〔下若菜〕	あさみは、浅ましがり of のつまりたるにて、俗に興をさまし、きもをつぶすといふごとく、めでおどろく事をいふなり。	キヨウサマス アキレル 驚くにも感 ずるにもいふ。あさましがる也。

ひさしうえためらひ給はず 〔柏木〕	ためらふは、俗に見あはすといふが如し。	ミ合セル　チ、ウスル
鳥のせうえうの物〔夕霧〕	せうえうは、川せうえうなシどのせうえうにて、俗に殺生といふにあたれり。せうえうしていけどりたる鳥をいふなるべし。	ユサン　河せうえうハウヲ殺生也。

見て明らかなように、『雅語訳解』は『補遺』で検討した注釈の中から俗語訳に関するものを再利用して構成していることがわかる。もちろん、『雅語訳解』は収録語数が約一四〇〇語であるから、ここに引用したのはそのほんの一部に過ぎない。しかしながら、『雅語訳解』が研究史上はじめて、俗語によって古語の意味と用法を解説した辞書であることを斟酌すれば、それに先立つ『補遺』の果たした役割はおろそかにはできない⁽⁸⁾。しかも、それは『玉の小櫛』の補遺でありつつ、『古今集遠鏡』の精神を受け継ぐ注釈書であることも注目に値することである。

以上見てきたように、『補遺』はさまざまなレベルにおいて『玉の小櫛』を補い、宣長の古典文学研究を推し進めようとする注釈書であると言ってよからう。

三、後進の挑戦―橘守部『湖月抄別記』

橘守部は伊勢国に生まれたが、学統としては特にこれといった師匠を持たず、独学で国学を修めた。その学問の拠所は神話研究にあったが、平安朝の物語や和歌の研究にも業績を残した。天保五年十二月序の『湖月抄別記』もその一つである。「湖月抄」の名はあるが、それは『湖月抄』をテキストとしたこと以上の意味はなく、守部自身が「此書湖月抄別注とは名づけたれど、まことは源注拾遺玉小櫛の別注のごときなり」(序)と記すように、契沖『源註拾遺』と宣長『源氏物語玉の小櫛』を対象とした注釈書である。桐壺・帚木の二巻のみであるが、そこには守部の『玉

の小櫛』観が垣間見え、さらには平安朝文学研究の要諦が記されていると言つても過言ではない。桐壺巻では一〇六箇所、帚木巻では一一六箇所にわたって加注している。ここでは、その中から（１）『玉の小櫛』批判、（２）語源研究への進展、（３）パラフレーズの模索、という三点に絞つて『湖月抄別記』の特徴を観察したい。

（１）『玉の小櫛』批判

『湖月抄別記』は『源註拾遺』と『玉の小櫛』を組上に載せた注釈書であるが、とりわけ『玉の小櫛』に対する批判は激しい。あたかも一連の宣長著作批判の一環であるかのごとくである^{（９）}。守部の『玉の小櫛』批判は多岐にわたっているが、宣長が文脈理解の観点から本文の誤脱を想定し、これを補おうとする態度を批判するものを見てみることにしよう。桐壺巻の末あたりの次の文に対する注釈である。

心のうちには、たゞふちつばの御ありさまを、たぐひなしとおもひ聞えて、さやうならん人をこそみめ。にるものなくもおはしけるかな。おほいどの、君、いとをかしげにかしづかれたる人とはみゆれど、こゝろにもつかずおぼえ給て、おさなきほどの御ひとへこゝろにかゝりて、いとくるしきまでぞおはしける。

光源氏が継母にあたる藤壺に理想的な女性像を見出し、心にさざ波が立ち始めるというシーンである。「こゝろにもつかずおぼえ給て」に対して、宣長はつぎのように記している。

此上に詞たらず脱^{ヌケ}たるにや。その故は、さやうならん人といふより、人とは見ゆれどといふまでは、源氏君の心を、直^{シラシカ}にいへる語、心にもつかず云々は、物語の地よりいへる語なれば、かならずその堺に、云々といふ詞なくては、とゝのはず。さるは後の人の、写すとして、おとしたる物か。はたもとより紫式部が、とりはづして誤れるものか。此たぐひなること、卷々をりゝある也。

物語にはいわゆる草子地の文と会話文・心内文があり、それらは明確に区別されているはずである。合理的に考えて、それらを峻別するために「云々」という語が置かれるべきである。それが無いのは後人の誤写か、著者の錯誤かのどちらかであるというわけである。このような判断に基づいて、宣長は源氏物語の本文をしばしば改変した。守部はこれに対して草子地の特殊性という観点から次のように批判する。

大かたは冊子地にうつる所は隔てたる詞あるべきなれど、悉くしかせんも煩わしき事もある故に、をりくは其句中にこめおく事もなかなからん。こは結ぶべきてにをは結び切ずして下へいひつけ、又詞に皆までいはで省きおく事あるたぐひ也。こはおはしけるかなとあるかなの嘆息に、源氏君の心をこめて其次の詞より直に冊子地の詞也。かなの下にとやおぼすらんなど含めてきくべし。その故は、源氏の御心より大いどの、君又かしづかれたる人とは見ゆれどなどは、いかでか宣はん。共に皆冊子の地より云詞とあらはに聞えたるものをや。よく味はへて詞のいひなしを聞しるべきにこそ。

守部の見解としては、後世の誤写や著者の誤記ではなく、草子地の特殊性であるというのである。このような源氏物語において、地の文と会話文・心内文の境界が不分明な点について、後に中島広足によつて「うつり詞」という概念で認識されることとなり、その考え方は近代の物語研究に継承されることになる⁽⁹⁰⁾。

もちろん、この他にも個別具体的な例について『玉の小櫛』における宣長注を批判していくのであるが、『玉の小櫛』に注のないものにも言及するのである。たとえば、桐壺卷冒頭近くの「めをそばめつ、」について、守部は次のように記している。

そばめとは、そばくしと云、そばと同じ。そばとは、凡て稜^{カド}ある物を云。(中略)枕^{カド}冊子に、木はいへる中に、そばの木、はしたなきこ、ちすれどもとあるも、そばと云名を、そばくしきよしにいへる詞なり。さればめをそばむと云も、目を引立

て物を見るより云ひて、俗に目角をたつと云と、同じ心ばへなる詞なり。小櫛は、いかに心得られたるにか、此言に注せず。

このように守部は「そばめ」について用例を挙げつつ、その語義を推定するのであるが、「小櫛」はこれを全く取り上げていないと批判するのである。『湖月抄別記』が単なる源氏物語の注釈であれば、先行注釈を訂正したり、独自の自説を積み上げることだけで十分であろう。先行注釈が取り上げていないことを指摘する必要はいささかもない。『湖月抄別記』が「小櫛」を名指しして批判する必要はないのである。あえて「小櫛」が注釈していないことをあげつらうのは、「小櫛」に必須の箇所への着目がないことを顕在化させるためであろう。つまり、わざわざ「小櫛」を非難することが目的の一つであったということである。そういった意味で、『湖月抄別記』は一連の宣長批判の文脈で把握する必要があるだろう。

(2) 語源研究への進展

次に宣長の古語の解釈の方法について、明確に反旗を翻したことを指摘することができる。そもそも宣長は「語釈」について、いかなる考え方を持っていたのか。たとえば、『古事記伝』三之巻において、古事記冒頭の「天地（あめつち）」に関する解釈について、次のように述べている。

天地は、阿米都知の漢字にして、天は阿米なり。かくて阿米てふ名義は、未思得ず。抑諸の言の、然云本の意を釈は、甚難きわざなるを、強て解むとすれば、必備める説の出来るものなり。

「天地」の「天」（あめ）について「名義は、未思得ず」として、最初から語義の追究を放棄しているように見える。

しかしながら、「名義」^{ナノコゴロ}とはいわゆる「語義」ではなく、「語源」を意味するものだったのである。それは続く文に「然云本の意」^{シカイフモト ココロ}とあるからだ。要するに、つねに語源に基づいて言葉の意味を説き明かそうとすると、無理が出て間違つた考えが発生するというのである。宣長はこのことを『うひ山ぶみ』の本文(ツ)「語釈は緊要にあらず」の注釈の中で、次のように詳述している。

語釈とは、もろ／＼の言の、然云本の意を考へて、釈をいふ。たとへば天といふはいかなること、地といふはいかなること、釈くたぐひ也。こは学者のたれもまづしらまほしがることなれども、これにさのみ深く心をもちふべきにはあらず。こは大かたよき考へは出来がたきものにて、まづはいかなることとも、しりがたきわざなるが、しひてしらでも、事かくことなく、しりてもさのみ益なし。されば諸の言は、その然云本の意を考へんよりは、古人の用ひたる所をよく考へて、云々の言は、云々の意に用ひたりといふことを、よく明らめ知るを、要とすべし。言の用ひたる意をしらでは、其所の文意聞えがたく、又みづから物を書にも、言の用ひやうたがふこと也。然るを今の世古学の輩、ひたすら然云本の意をしらんことをのみ心がけて、用る意をばなほざりにする故に、書をも解し誤り、みづからの歌文も、言の意用ひざまたがひて、あらぬひがこと多きぞかし。

古事記冒頭の「天地」を例として、「然云本の意」を解くことは学者が真つ先にしたがるけれども、必ずしも追究しなければならぬことではない、というのである。「然云本の意」は知らなくても不便はないし、知つても大して益するところがないという。それでは宣長は語義を理解するためにどうすればよいと考えているかといえ、^{シカイフモト}「古人の用ひたる所」を知ることが重要であると主張するのである。「古人の用ひたる所」とは「用法」と言い換えることが可能であろう。用例を知らなければ、古書を理解することもできないし、自ら文章を執筆したり、歌を詠んだりすることもできないというわけである。要するに、宣長は「語源」の探究よりも「用例」の博搜と「用法」の分析が重要

であると言っているのである。「語釈は緊要にあらず」というフレーズは、語義探究の断念を示唆するものではなく、語源研究の限界を指示するものだったのである。

さらに宣長は『玉勝間』八の巻「言の然いふ本の意をしらまほしくする事」(四二三)を記して、あるべき「語釈」の方法の周知を徹底した。次のような文である。

今の世古学をするともがらなど殊に、すこしとほき言といへば、まづ然いふ本の意をしらむとのみして、用ひたる意をば、考へむともせざる故に、おのがつかふに、いみじきひがことのみ多きぞかし。すべて言は、しかいふ本の意と、用ひたる意とは、多くはひとしからぬもの也。たとへばなかくといふ言はもと、こなたへもかなたへもつかず、中間なる意の言なれども、用ひたる意はたゞ、なまじひにといふ意、又うつりては、かへりてといふ意にも用ひたり。然るを言の本によりて、うちまかせて、中間なる意に用ひては、たがふ也。又こゝろぐるしといふ言は、今の俗言に、気毒キナドクなるといふ意に用ひたるを、言のまゝに、心の苦きことクレシに用ひては、たがへり。さればこれらにて、万の言をも、なすらへ心得て、まづいにしへに用ひたるやうをさきとして、明らめしむべし。言の本にのみよりては、中々にいにしへにたがふことおほかるべしかし。

ここでは「然いふ本の意」(語源)と「用ひたる意」(用法)の相違について言及する。「なかなか」という言葉の語源は「こなたへもかなたへもつかず、中間ナガラなる意」であるけれども、用法は「なまじひにといふ意」また転じて「かへりてといふ意」であるという。また、「こゝろぐるし」は元来は「心の苦きことクレシ」であるが、一般には「気毒キナドクなるといふ意」に用いるという。この二例で明らかのように、言葉は語源よりも用法を重んじることが語義研究としてすぐれていると宣長は考えたのである。

このように宣長が繰り返し繰り返し「然いふ本の意」(語源)を探究する研究に警鐘を鳴らすのは、それなりに理

由がある。日本古典文学に関する先行語義研究が語源研究に偏重していたこともさることながら、漢学・儒学における語義研究が必然的に語源研究に頼らざるを得ないという事情があつた。漢学・儒学は外国語研究であるから、用例を博搜し用法を抽出することには限界があつたわけである。宣長はそういった語義研究は「漢意」（からごころ）であるとして、厳しく糾弾した。宣長の「語釈は緊要にあらず」には、このような経緯があつたのである。

これに対して守部は真正面から異議を唱える。桐壺卷冒頭近くの「いとあつしくなりゆく」について、守部は次のように述べている。

拾遺云「日本紀に、彌留をアツシキと訓み、又篤癡をアツエヒと訓るに合せて思へば、病の輕きを薄しと云ひ、重きを厚しと云にや。小櫛云、身よわく病あるをいへり。拾遺に云云といへるは、物語にては協はず」とあり。凡てかやうに云ひのがれおくが、彼の小櫛の心ぐせなりけれど、そはなかなかにひが心得なり。その故は、たとひ時代に依て転る事ありとも、其本より解きさだめずして、いかでか末々の転用を明らむる事あたはん。身よわく、病あるをいふとは、きのふけふのうひ学びも、察して知べき処なれど、さやうに解んは、只推量といふものにて、学者の釈にはあらず。今拾遺の説に就て弁へむに、大病をあつしといふは、物にあまた見えて論なし。

契沖が『源註拾遺』で日本書紀の訓みに基づいて「病の輕きを薄しと云ひ、重きを厚しと云」と推定したものを宣長は採用しない。物語には適用できないというのがその理由である。これに対して守部は、宣長の処理を言い逃れであるというのである。守部によれば、後世に転用されることがあつても、「其本」（語源）を説明することによつて、その語の用法もまた解明することができるというわけである。さらに守部は宣長の注について、初学者にもできる「推量」であつて「学者の釈」ではないという。激越な批判であると言つてよからう。

それでは守部はいかなる理念によつて、語義解明の方法として語源探究を位置づけようとしたのか。守部はそのことを「猶いぶせさをかぎりなくの給はせつるを」（桐壺、八丁右三行）の注釈の中で語っている。

凡て詞の転るはおのづからにして転るわざなれば、いかさまに転り活きゆくとも、其故なくすぎなき方に転じゆくものにあらず。是につきても言語を解くには、先づ其言の本源より解そむべきわざにぞある。本を究めて末の解ざる事ある事なし。然るに本居氏の此物語の釈さまは、上にも往々いひたれど、後世の儒者の小説物をさたすめるふりに擬はれたるなれど、そはものにこそよれ。此物語や、今は凡そ八百五十年來の古書なるものを、物語書といへば古今をいはずいたく変転せるものとして、語釈もとゞかざるさまにあなづり貶せるは、いとおふけなきわざなりかし。假令今世の俚言といふとも、凡て人の口より云ほどの言に、むげに其の所縁なき言のあらんやは。守部が今かく言の意をかく云を、さる説にならへる輩は、うるさき方におもふべけれど、元來言の本義をたづねんものとおもひたらぬは、其言語を重みせざる心ぐせより起るわざなりければ、うるさかりなんとしるゝかくはいふ也。

守部には、言葉はたとえ「変転」しても、しかるべき道理に従つて転じるはずであるから、語源を解明するところから始めるのが筋であるという信念があつた。それゆえ、語源（本）を知れば語義（末）がわかると考えたのである。このように「言の本義」から語義を解明する手法は、宣長および宣長門下とは真つ向から対立するものであるが、それは必ずしも宣長が批判した牽強附会な旧注に逆戻りすることを目指したわけではない。あまりにも禁欲的であるがために、語義検証が窮屈になつてしまふ弊害から抜け出そうという意図があつたと思われる。宣長が切り捨てたものの中に重要なことがあると気付き、それを拾い上げようとしたのである。そのようなことは宣長門流にはなかなかできないことであらう。

(3) パラフレーズの模索

『湖月抄別記』には『源註拾遺』や『玉の小櫛』とは無関係に、守部独自の趣向を組み込んだ注釈法が見える。その最も特徴的なのは、難解な文脈について言葉を補ってパラフレーズするという行き方である。左に列挙しよう。

- ① 凡て此あたり詞すくなくにして、初学の輩には聞とりがためるさまなれば、此間十行許詞を添て左に注すべし。〔いとよう似たりしゆゑかよひて見え給ふも云云〕
- ② なほ此条より八行の間、いかゞくちをしからぬといふまで、何れの註にても行とゞかず。又ひが説も多く、文のつゞきもきゝとりがたきさまなりければ、くはへ言してさとすべし。〔かたりもあはせばやと〕
- ③ 此段実にきゝとりにくきつゞきがらどもなりければ、上の詞より例の卑言をくはへてさとす也。〔たのもしげなきうたがひあらんこそ〕
- ④ 猶さても初学のほどの耳には、聞とりにくきさまなれば、例の卑言をそへてさとす也。〔手を、りて云云の歌〕
- ⑤ 今此説にもとづきて、次に省る語どもをそへてさとさむに。〔はかなき花もみぢといふも云云〕
- ⑥ 此条も耳近き詞にして、何とかや文義の聞とりにくげなるさまに見ゆ。故例の卑言をくはへてしらす也。〔このさがなものを云云〕
- ⑦ 今三葉の神無月の比ほひと云より、十行許のあひだ例の卑言をくはへてさとすべし。〔この人のいふやう云云〕
- ⑧ さて此段、古注もたがひ、小櫛の釈もひが事にて、何れにもよりがたければ、此行より八九行の間、例の卑言をくはへてさとす也。〔伊予の介はかしづくや云云〕
- ⑨ かくて以下の文ども、きのふけふより見そむらん人には、聞とりがたげに見えたれば、例の打まかせたる卑言どもをくはへてさとす也。〔まことに心やましくて云云〕

以上のように、原文のままでは聞き取りにくいので、「初学の輩」に対する配慮として適切な「卑言」を添えたというのである。また、いずれの注釈でも了解が難しいと述べていることも注目すべきである。つまり、守部は古典文学作品を理解し研究する際に、注釈という方法が無力であると諦観した。それを補完するために「卑言」によるパラフレーズを編み出したわけであるが、それは守部による古典文学作品への方法的模索であったということができよう。具体例を検討しよう。比較的短い⑤を原文とともに掲出すると、次のごとくである。

《原文》はかなき花もみちといふも、をりふしの色あひつきなくはかゝしからぬは、露のはへなくきえぬるわざなり。さるによりかたき世ぞとはさだめかねたるぞやといひはやし給ふ。

《卑言》はかなき花もみちといふ〔と〕も、をりふしの色あひつきなくはかゝしからぬは、露のはえなく消〔て見え〕ぬわざなり。〔まして妻とすべき女は大かた何事もたらはではかなきひがたし。〕さるにより〔て上のをり／＼えらぶ事の〕かたき世ぞとは定めかねたるぞやと〔きんだちとも／＼〕いひはやし給ふ。

要所要所に言葉を忍ばせて文章表現の理解に資することを目指している。補う言葉は助詞などの些細なものから、動作主体といったもの、あるいは文脈理解上あつてしかるべきと考える言説を大胆に補う場合もある。このような補足によって、格段にわかりやすくなったと言つてよからう。

ところで、⑦の末尾に次のような言説が記されている。

さて右の内、他はたゞ文義をくみしらせんまでにくはへし詞どもにて、本文の方にさる言どもを省るにはあらず。雅文と俗文との差のみなり。

添加した言葉は本文に省略された言葉ではないというのである。この指摘は重要である。というのも、添加した言葉は原本復元のためではなく、原文理解に資するためだからである。また、守部は言葉の添加を「雅文」と「俗文」の違いに求めている。このこともまた重要である。つまり、雅文を雅文のまま理解することは至難の業であって、言葉を加えることによって俗文的にする必要があるというのである。これは必ずしも語彙レベルの問題ではなく、より一段高い文体レベルの問題である。その証拠に添加された言葉は俗語ではなく、純然たる雅語だからである。雅語を添えて文脈を敷衍した文章が初学者向けであるというのはわかりにくい、それが「俗語」的であるというのは示唆的であると言つてよからう。

なお、守部は「卑言」を添加するという方法を応用し、『土佐日記舟の直路』を刊行した。天保十三年のことである。それは原文を活かしながら、随時あるいは適宜言葉を差しはさむことによって、古典文の理解を促進するという方法であって、宣長が編み出した全文俗語訳の手法とは異なる啓蒙化と言つてよい。この手法は近代期以降は継承されることはなかったが、古典文学が一般に普及する際に辿った道の一つとして銘記すべき事柄であると言えよう。

以上のように、『湖月抄別記』は主に『玉の小櫛』に基づきつつ、これを批判することを念頭に置きながらも、新たな注釈法を模索したという面もあり、単なる未刊の注釈書の一つとして済ますには惜しいほど豊富なアイデアが含まれているのである。

四、私淑者の飛翔―萩原広道『源氏物語評釈』

萩原広道は宣長没後に生を受け、大國隆正に弟子入りするが、独自に国学を修め、宣長に私淑した一人である。宣長の『てにをは紐鏡』『詞の玉緒』の当否を検証し、係り結びの法則に修正を加えたことでも有名である⁽¹¹⁾。広道が

『源氏物語評釈』を出版したのは嘉永七年（文久元年）のことである。病没したために花宴巻で中絶しているが、『源氏物語評釈』は近世源氏研究の中でも白眉と評されている¹¹²。『源氏物語評釈』はそれまで絶対的テキストとして広く利用されてきた『湖月抄』に代わって、源氏物語の本文を提供したという点が特筆される。つまり、それ以前の源氏物語注釈は『湖月抄』に基づいて、その丁付けに従ってこれに上書きする形で注釈が蓄積されてきたのであるが、『源氏物語評釈』は新たに本文を提示することにより、源氏物語をそれ単独で読むことができるテキストとして出版したのである。幕末に刊行されたことも含めて、近世における源氏物語注釈の総決算の意味合いがあると言つてよからう。もちろん、源氏物語の本文を提供したことだけが『源氏物語評釈』の功績ではない。それ以外にもさまざまな成果を残しているが、ここでは『玉の小櫛』との関係という観点で整理してみたい。

まず、広道は総論下「此物語注釈どもの事」において、諸注釈を解説する中で『玉の小櫛』を次のように評している。

さて其次に、本居翁の玉小櫛あり。此書は物語といふもの、すべてのやうを論ぜられたること、いとこまかにして、昔より其類あることなし。中にも作りぬしのこゝろしらひどもを、此物語の中に何となくかすめていはれたるを見出て、巻々のさる所々を引あつめて其よしを注せられたるなどは、かけても思ひ及ばぬかうがへなるに、物のあはれをしる事、物語のむねとあることなるよしをいはれたるなども、昔よりの注どもにたえていはれぬ事にて、いとめづらかにめでたきこと、上条にかつゝ引出ていへるがごとし。猶其委しきよしは、彼書の一二の巻にいひ尽されたれば、今はそれにゆづらひて略きたることゝ多し。かならず別に見るべき也。

先行諸注釈とは違つて、『玉の小櫛』の要諦は物語概論にあると広道は見えていた。それは『玉の小櫛』一の巻から二

の巻に及ぶ「大むね」に記されている。広道はそれを「作りぬしのこゝろしらひ」と「物のあはれをしる事」の二点に要約している。前者の「作りぬしのこゝろしらひ」とは『玉の小櫛』に「作りぬしの本意」という語で示されたものであり、それらは物語の内部にちりばめられていると宣長は考えた。それを源氏物語の各巻にあるさまざまなシーンの中から抽出して、そこから作者の物語観を読み取るうとしたのである。とりわけ宣長は螢巻に著者の物語論の本質があると見た。『玉の小櫛』一の巻には次のようにある。

さて紫式部が、此物語かける本意^{ホコ}は、まさしく螢巻にかきあらはしたるを、それもたしかにさとはいはずして、例のふる物語のうへを、源氏君の、玉かづらの君に、かたり給ふさまにいひて、下心に、この物語の本意をこめたり。

このように宣長は、作者紫式部が螢巻における源氏と玉鬘の対話の中に、物語というものの本質を忍ばせたものと確信したのである。特に次に引用する源氏の台詞の中に物語の本質が原寸大で表現されていると考えた。

さてもこのいつはりどもの中に、げにさもあらむと、あはれを見せ、つき／＼しくつゞけたるはた、はかなしごととしりながら、いたづらに心うごき、らうたげなる姫君の、物思へる、見るにかた心つくかし。

宣長はこの箇所について、次のように注釈を入れつつ、解説している。

物語は、おほかたつくりこと也とはいへども、其中に、げにさもあるべきことと思はれて、作り事とは知ながら、あはれと思はれて、心のうごくこと有と也。いたづらにとは、作り物語を見て、心をうごかすは、何のかひなく、いたづらなればいふ。古今集の序に、絵にかけるをうなを見てといへる、是也。らうたげなる姫君の云々は、古物がたりに、さるさまを絵に書たる

を見る也。心つくも、心うごくと同じやうの心ばへ也。下心、げにさもあらんと、あはれを見せといへる、これ源氏物語のまなこ也。此物がたりは、しか物のあはれをしらしむることを、むねとかきたるもの也。

物語は虚構であるけれども、虚構であることを知りながら読者の心をうち振るわせるものであること、それが源氏物語の眼目であるというのである。「下心」とは先の引用にもあつたように、表層の物語内容とは別に作者の意図を指す用語である。つまり、物語の中にその物語の意図が込められているのであるから、漢籍による勸善懲惡や儒教や仏教による善惡是非の判断といった尺度をあてはめるのは間違っているというわけである。

それでは、源氏物語に書かれた「下心」とは何なのか。それが広道が指摘する二点目の特徴「物のあはれをしる事」ということになる。これについては『源氏物語評釈』の総論「物語の心ばへ并物のあはれを知るといふ事」に次のように取り上げられている。

物のあはれを知るをよしとし、しらぬをあしとしたる事も、小櫛にくはしくははれたれば、必見るべし。この事のすちを知ざれば、此物語見ても、其深き心ばへをしるによしなし。実にこの物のあはれを知るといふ事物語ふみのむねとある事は、この本居先生^{ほんけ}ではじめて見いで、委しく説述^{よきべ}られたるにて、いともく心ことにめでたき考になん有ける。

宣長が「物のあはれを知る」説が物語の要諦であることを見破り、それを詳しく論述したことを広道は絶賛しているのである。広道は「物のあはれを知る」説に関しては、『玉の小櫛』を参照することを指示して、あえて詳述することとは避けているが、逆にそのことによって広道がいかに「物のあはれを知る」説を全面的に支持しているかがわかる。『玉の小櫛』には補足説明が不必要的くらい精緻な議論が展開されていると見ているのである。こういった

「物のあはれを知る」説を広道は源氏物語の叙述の中に見出し、これを注釈の中で指摘している。次の通りである。

・ かくかすかなるすまひするわび人ははかなきをり／＼の本草の花又は空のけしきなどによそへても物のあはれを思ひしりたるさまをとりなしなどして、そのこゝろざしの傍よりも推量られたるこそ哀ならめと也。(末摘花、さやうなるすまひする人は云々)

・ 空のけしきさへをりからの風流なる物の感を見しりがほ也と也。(紅葉賀、見しりがほなるに)

このように宣長がうち立てた「物のあはれを知る」説を源氏物語の各場面に適用し、宣長の精神を受け継ぐ意志を表明したのである。

さて、広道が賛同したのは、むろん『玉の小櫛』の総論部だけではない。注釈部においても注釈の精神とその方向性を支持したのである。前出「此物語注釈どもの事」の続きを見てみよう。

さて卷々の注釈のやうも、さき／＼の抄どもとはことかはりて、めでたき説どもの多かる中に、てにをはの格、詞のはたらき様などは、此翁の世に出られざりしほどは、いとたど／＼しきことなりしを、はじめて委く考へ明らめられしほどのことなれば、語のうつりざま、はたらきざま、てにをはの係、結などの脉、いと／＼こまやかにして、みやび言のつかひざまは、此ふみにて始めてあきらかなれりとぞいはまし。

各卷の諸注釈について、助詞や助動詞の規則、活用、係り結びなどといった宣長が解明した文法法則に関する指摘が詳細ですばらしいと称賛する。また、雅語の用法が『玉の小櫛』によつてはじめて明らかになったと評するのである。文法研究と注釈とは宣長国学を牽引する車の両輪なので、そういった意味で広道の指摘は核心を突いていると言

つてよい。具体的にみていくことにしよう。

広道が『玉の小櫛』の説を踏襲する場合、『玉の小櫛』の説をそのまま引用するだけのもの、引用した上で自らの「釈」の中でこれに賛同するもの、そして「釈」の中に『玉の小櫛』の説を要約して追認するもの、という三種類がある。一つ目はたとえば、「いづれのおほん時にか」（桐壺）について、広道は『玉の小櫛』が付した注をそのまま引用している。

此物語はすべて作り物語にて今世にいはゆる昔ばなし也。さる故に昔いづれの御時にかありけん、かゝる事の有しといへるにて、此詞一部にわたれり云々。

冒頭からしてそうであるが、『玉の小櫛』の注釈を丸ごと引用することにより、宣長説を踏襲することが最も多い。これは総論で述べていた事柄を裏付けるものと言つてよからう。

次に、二つ目について、「げに後におもへば」（帚木）をめぐる議論を見てみよう。これを含む源氏物語本文は次の通りである。

さるべき節会など、五月のせちにいそぎまいるあした、なにのあやめも思ひしづめられぬに、えならぬねをひきかけ、九日のえんにまづかたき詩の心をおもひめぐらし、いとまなきおりに、きくの露をかこちよせ、などやうのつきなきいとなみにあはせ、さならでも、をのづからげに後におもへば、おかしくも、哀にも、あべかりけることの、そのおりにつきなく、めにもとまらぬなどを、おしはからずよみいでたる、中々心をくれてみゆ。

雨夜の品定めのうち、左馬の頭が女性談義の中で、かしこぶって時宜に合わせた趣向の歌を詠もうとする女の話を持ち出す。その女は自ら詠んだ歌の後になって振り返って、ああでもこうでもすればよかったと後悔するのは後の祭りであるというのである。会話文であることを差し引いても文脈が錯綜している観が否めない。これに対して『玉の小櫛』は次のような注釈を付している。

其歌を後に見て思へば也。げにとは、其歌に同心していふ也。さてこは、後におもへばげにと、うちかへして心得べし。さて又此所の語、さならでもおのづからと、後に思へばとは、二つに分てかへるにて、後におもへばさならでもといふ意にはあらず。かくてそのさならでもおのづからと、後に思へばとは、二つに分ていへるにて、後に思へばさならでもといふ意にはあらず。かくてそのさならでもおのづからと、後に思へばとの二つを合せて、おかしくも云々と受たる語にして、後に思へばおかしくも云々ともつゝき、又さならでもおのづからおかしくも云々ともつゝく意也。すべてかやうのところ、言のいひざま、てにをはなどを、こまかにわきまへて、すべての語の意を心得べし。よくせずはまされぬべし。

宣長はこの錯綜した文を「げに」の係り受けという観点から整理する。つまり、「げに」は「後におもへば」に係るのではなく、それを越えて「をかしくも、あはれにも」に係っていくと考えた。その上で「さならでも、おのづから」と「後におもへば」とが全くの並列関係にあつて、それがともに「をかしくも、あはれにも」に係るというのである。この注釈に対して、広道は次のように論究している。

この玉小櫛の説まぎらはしきがごとくなれど、よく文脈を見得られたるもの也。くりかへし見てあぢはふべし。さてかくても猶いとなみにあはせとある語少しおちぬこゝちす。もしくは此下に詞脱たるか。試にいゝなどといふ辞など有しを、上など、重るやうに思ひてさかしらにけづりたるにや。

ここは一部留保しているように見えるが、全面的に宣長の文脈理解を支持している。その上で私案を添えているのである。たしかにこのように込み入った文脈を説明する注釈は丸ごと引用するほかないだろう。

三つ目について、「をりふしの色あひつきなく云々」（帚木）における議論を見てみたい。当該箇所は頭中将が妻選びの基準を話す中で、女を時節を過ぎて散る花紅葉に見立てる場面である。

花紅葉もそのをり／＼の色あひはか／＼しからぬはすこしの光映ハユもなく、いろの消はて、興なきわざ也といふ意なり。露は花紅葉をにはし出る物なる故にいさゝかの事をつゆといふ詞にかねていへるたくみ也。新釈にたゞ少ばかりの意にのみとかれたるはわろし。さてこれは本妻とすべき女のたとへなること、玉小櫛にいはれたるがごとし。

物語の筋は省略するが、『玉の小櫛』に述べられた説を要約して提示し、これを追認しているのである。このような要約追認の注釈は少なからずある。このように文法、語法、語義などに関して、広道は宣長の見識に全幅の信頼を置いていることとくである。

さて、前掲の「此物語注釈どもの事」の続きを見てみることにしよう。

しかのみならず、大かたの書の見やう、人情のおもぶくさまを、深く考へて物せられたりと見ゆること多くして、其説どもいとおだやかに、強説シヤゴトと聞ゆることはいと／＼稀也。すべてのもの、ちうさくのみにはあらず、何事の説にても、人情のおもぶく末々をこまかにさぐりて、其世のさま、作りぬしの意はいふもさら也。今の人の打きく所までも、深く思ひはかりて物せざれば、理コトワザは理として、げにさなりとはうけあへぬものなるを、此翁の説はさる事までゆきたらひて、げにとおぼゆる事はなほだ多し。

文章表現上の語法や文法だけでなく、「人情のおもぶくさま」への洞察が行き届いているというのである。たとえば、宣長は『玉の小櫛』二の巻「くさくさ」のこゝろばへ」の中で次のように述べている。

此物語、源氏君をはじめて、よき人としたる人のうへの事は、何事も、めでたきさまにほめたるに、そのよみ給へる歌のみは、ほめたる所一つもなくして、其人の他事マコトのよきにあはせては、歌はあしきやうにいへることのみ、ところどころ見えた。そは此物語の中の人々の歌は、みな紫式部みづからよめるなれば、ほむれば、われほめになるゆゑ也。

源氏物語の中で詠まれる歌は、総じて地の文での評価が低い。「よき人」が詠んだ歌でも例外なく褒めることがないというのである。その理由として、作中の歌はすべて紫式部が詠んだ歌だから、褒めれば傲慢になるからであるという。具体的に見てみよう。「かやうのすぢなども」（夕顔）における『玉の小櫛』の注である。

かやうのすぢとは、歌よむことをいへり。心もとなきは、未熟なるよし也。さてかくいへるは、実に此歌のこゝろもとなきにはあらず。例の紫式部がひげ也。諸抄此意を得ず、ひがことなり。

これは夕顔が詠んだ「さきの世の契り知らるる身のうさに行く末かねて頼みがたさよ」に対する「心もとなかめり」という評語に対する分析である。旧注は地の文にある自己卑下の評語を額面通り受け止めて、良くない歌として解釈しているというのである。このことは確かに機転を利かせなければわからない事柄であろう。宣長が指摘するまで、そのことに着目した注釈が皆無であったことからわかる。広道が高く評価するのは、このような物語の見方や読み方なのである。この他にも先行注釈が見出せなかった観点がある。広道はそういった点を宣長注釈の精髓であると考えた。

そうして広道は、各注釈を総括して次のようにまとめている（「此物語注釈どもの事」）。

然れば此物語いできてよりこのかた、注といふ注の中には、この玉小櫛にまさる物はひとつもなく、作りぬしのしたにおもはれたることを見得られたりとおぼゆる事も、またこの小櫛に過たるなんなりける。これはあながちにほむるやうなれど、他ほかの抄どもとくらべ見て、よくく味ひするべき也。

ほぼ絶賛と言つてよい。これまでに出了た注釈の中で最もすぐれた物であるという認識を示している。師弟関係のない間柄を結ぶものが何であつたのかは別にして、広道は宣長に私淑したということができよう。

もちろん『源氏物語評釈』は『玉の小櫛』をただ単に称賛ばかりしているわけではない。宣長を批判することもあれば、説の軌道修正を求めることもあつた。一例だけ確認しておこう。「もとの品時世のおぼえ打あひ」（帚木）について見てみたい。これは雨夜の品定めで左馬の頭が自らの理想的な女性像を披露する台詞の発端である。

这段は上が上の品をいひてそれをば打おき、次に下が下の中にも思ひの外にめづらしき事あるをいへり。反対の文法なり。玉小櫛にこれをも中の品のうちなりといはれたるはいさ、かたがへり。

広道はここで話が上々品の女から下々品の女へと移る展開であるとし、これを「中の品の一種」（「うちあひてすぐれたらむ」の注釈）とした宣長を批判する。宣長説を盲信するのではなく、是々非々の態度で臨むのである。

ただし、この話題を「下品」としたのは広道だけでなく、『花鳥余情』や『湖月抄』もまた「下の品の人」としている。しかしながら、広道が「下が下」とするのは理由がある。それはそれまでが「上が上の品」を話題にしており、それとの関係で「反対の文法」で「下が下」に及んだと考えるのである。この「反対の文法」こそが源氏物語研

究史上、空前の読解法であつて、『源氏物語評釈』が単なる近世期の注釈の集大成で終わらない特質でもあつた。「反對」は凡例に次のように述べている。

これは其事の反^{ウラ}うへに相對^{ヒカ}ふをいふ。たとへば雨ふると目てると、夜と昼となどのごとし。其事同じからずといへども、表裏^{ウラウヘ}に相對ふをもて反對といへり。

人物や事柄が逆の關係を持つ「對」を「反對」と称する。それは同じ程度の對である「正對」と對極を成す。このような物語を分析するための用語を「法則」と呼んでいる。「伏線」や「抑揚」のように漢籍由来の批評語もあれば、「草子地」のような源氏物語注釈史上の用語もあり、都合二十一の「法則」を設けている。これらの用語を縦横に駆使して源氏物語を評論していくのである。

広道は総論「此物語に種々の法則ある事」の中で、次のように記している。

まづ一部にわたりて一部の法則^{ノリ}あり、一卷ごとに一卷の法則^{ノリ}あり、一段^{キリ}ごとに一段の法則あり、一章^{クダリ}ごとに法則あり、一句^{コトバ}ごとに法則ありて、いさ、かなる事の末々まで、あやしきまでたらひたる法則あり。その一部にわたる法則といふは、時世年月^{ウツ}の移るを經^{タテ}とし、人事のゆきかはるを緯^{ズキ}として、物語の趣^キを作りなすに、時世年月の移りゆく經^{タテ}のかたにては、上条^ノにもかつゝいへるがごとく、まづ桐壺帝の大御代其次に朱雀院の帝の御代、其次に冷泉院の帝の御代、其次今上としるしたる帝の御代、と定めおきて、其中間^{ノナガラ}に必^ズ物語のなき空^{ムナ}しき年をおかれたる、これ法則なり。

大は物語全体から小は一文に至るまで、ことごとく「法則」が備わつていてという。それは物語世界の中で緊密に連動して働いていて、しかも物語の時間と空間、および自然や人物、出来事などをすべて支配しているとするのであ

る。そのようにして緊密な物語構造を分析することによって、期せずして旧説を葬り去ることもあった。たとえば、次の如くである（「此物語に種々の法則ある事」）。

さて又須磨のうつろひは、源氏君のしばしの衰へをかゝん為なるを、はやく若紫卷に其端をあらはして、北山にて良清に明石上の事をかたせたる、これその伏案にて、遠く須磨明石の巻をかくべき結構シツガマヘの法也。これを見ても、かの石山寺にて、須磨明石の巻より作られたりなどいふ、旧説の妄ウソなるを笑ふべし。

若紫卷に明石の姫君のことを語る場面を設定しているのは「伏案」（伏線）であり、須磨・明石巻を書くための「結構」であるという。つまり、源氏が須磨へ流浪を余儀なくされることは、すでに若紫卷の段階ではめかされていたことであるから、紫式部が石山寺に籠もつて湖に映る月を見て須磨・明石巻を構想したという伝説が荒唐無稽であると論証するのである。もちろん、そのこと自体は広道がはじめて指摘したことではない。たとへば、『湖月抄』「師説」に「これは須磨明石をかくべき帳本なり」と記していることから裏付けられる。しかしながら、個別の箇所において行方注釈と、これを物語全体に適用する評論とは根本的に異なる。広道の源氏物語の構造分析は、花宴巻で中絶したことを差し引いても、近世期に出た源氏研究の最高峰であるということができよう。

このような「法則」は広道の独創というわけではない。安藤為章『紫女七論』や賀茂真淵『源氏物語新釈』などですでに物語の「文法」について言及している。また、その多くが漢籍、とりわけ白話小説の批評語によって占められていた。曲亭馬琴が読本を創作する際に設定した「稗史七法則」と重なるところも多い。それは批評だけでなく、創作にも活かさせた。それゆえ広道は馬琴が絶筆した未完の『開卷驚奇侠客伝』を書き継ぐことができたのである。しかしながら、広道が拠り所とした法則は漢籍に基づく思考法であり、宣長が最も忌避し、排斥しようとした漢意であ

った。そういう意味で『源氏物語評釈』は『玉の小櫛』という藍から出た青であったということができよう。

宣長に私淑し、『玉の小櫛』に依拠しながらも、広道は注釈法を徹底しつつ、種々の物語法則を創設することによって、宣長から飛翔した。それは近代の文学研究を先取りするものであったと言ってよからう。

五、結 語

宣長にとつて源氏物語はいかなる意味があつたのか。宣長の業績はすべて『古事記伝』に収斂されるという考え方が一方で、宣長国学の真髄は源氏物語研究にあるとする見方もある。宣長が相応の時間を掛け、相当の労力を傾けて源氏研究に当たつたことは確かである。それは門弟、門外の区別なく、後進の研究者に十分に伝わつた。宣長以後においては『玉の小櫛』をいかに受容し、いかに反論するかということが、源氏研究を發展させる試金石になつたと見ることもできる。

それでは幕末維新时期を越えて、『玉の小櫛』はどうなつたのか。近代になつて、外国文学研究の方法が導入され、源氏物語も作品論や作家論、あるいは准拠論や構想論などの緻密で論理的な研究が取り入れられた。そして、それぞれに新たな成果を導き出したと言つてよい。しかしながら、それらの多くは宣長が『玉の小櫛』の中で試みた研究の延長線上にあると言える。それゆえ、源氏物語研究史上、『玉の小櫛』の果たした役割はとてつもなく大きなものなつてゐるのである。

註(1) 岩田隆「本居宣長年譜」(『宣長学論究』、おうふう、二〇〇八年三月) 参照。

(2) これに先行して『源氏物語拔書』を記している。杉田昌彦『宣長の源氏学』(新典社、二〇一一年十一月) 第二部第四章

- (3) 「『源氏物語拔書』から『紫文要領』へ―評論的源氏研究の形成過程」参照。
- (4) 源氏物語の年立については、『源氏年紀考』から『源氏物語年紀考』・『源氏物語年紀図説』を経て『源氏物語玉の小櫛』三の巻「改め正したる年立の図」「卷々のとし立」とした。杉田前掲書第二章「宣長の『源氏物語』年立研究―竹川卷・紅梅卷の前後関係をめぐって」参照。
- (5) 康定は浜田藩士の小篠敏を松坂まで遣わし、宣長の講義を受けさせもした。岡田千昭『本居宣長の研究』（吉川弘文館、二〇〇六年一月）第八章「『源氏物語玉の小櫛』の出版事情」参照。
- (6) 拙稿「宣長以後の物語研究」（鈴木健一編『源氏物語の変奏曲―江戸の調べ』、三弥井書店、二〇〇三年九月）、および「物のあはれを知る」説の近代―文学史と思想史を架橋する―（『アナホリッシュ国文学』三号、二〇一三年六月）参照。
- (7) 奥付には「文政三年庚辰春新刻」とあるが、森嘉基の序文は「文政四年八月」の年記を有する。
- (8) 拙著『本居宣長の思考法』（ベリかん社、二〇〇五年十二月）第一部第一章「本文批評の作法―『草庵集玉箒』の本文批評」参照。
- (9) 俗語訳成立史上における『古今集遠鏡』および『雅語訳解』の位置については、拙稿「俗語訳成立史（上）・（下）」（『日本文芸研究』六十五巻一号・二号、二〇一三年一〇月・二〇一四年三月）参照。
- (10) 守部の『古事記伝』批判については拙稿「『古事記伝』受容史」（『神戸大学文学部紀要』四十号、二〇一三年三月）参照。
- (11) 前掲『本居宣長の思考法』第一部第一章「本文批評の作法―『草庵集玉箒』の本文批評」参照。
- (12) 広道の著作『てにをは係辞弁』については拙稿「係り結びの法則成立史」参照。
- (13) 野口武彦『源氏物語』を江戸から読む」（講談社、一九八五年七月）参照。

（付記） 本稿は二〇一四年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）「本居宣長の国学の受容と国文学の成立に関する総合的研究」の成果の一部である。